

金子みすゞの3冊の遺稿集をめぐる考察

夏 霖

はじめに

大正時代、僅か20歳で、若き投稿詩人たちの「憧れの星」になった詩人金子みすゞの作品のほとんどは、彼女が26歳の若さで自殺した後、50数年ほど知られることはなかった。彼女の512編の作品が収録されている3冊の遺稿集『美しい町』、『空のかあさま』と『さみしい王女』が、1984年、矢崎節夫氏の努力で紹介され、全集として出版された。それまでほとんど知られることのなかった彼女の生涯についても、矢崎節夫氏は『童謡詩人金子みすゞの生涯』（以下『生涯』と略記）で詳しく紹介している。それ以来、みすゞの詩は、多くの人々に読まれるようになった。しかし、彼女の遺稿集の成立と巻名についての考察は、矢崎氏の『生涯』を除いてはほとんどないと言ってよい。本稿は、その遺稿集の成立と命名について、考察する。

1. 遺稿集の成立について

みすゞの3冊の遺稿集の中に収録された作品は全部で512編である。『生涯』には、第1遺稿集『美しい町』の中に収録された作品は大正12年から13年に作られた172編、第2遺稿集『空のかあさま』は、大正13年から14年までの178編、第3遺稿集『さみしい王女』は大正15年から昭和3年までの162編とある¹。そして、みすゞは結婚する直前に、2冊の詩集『美しい町』と『空のかあさま』を弟正祐に送った。この2冊の詩集はほぼ後の遺稿集通りの形でできあがっていたものだ²と『生涯』にはある。しかし、私は遺稿集の掲載順は、必ずしも作品の完成時期順ではなく、また雑誌に掲載された順でもないと考えている。そして、みすゞが結婚する前に正祐に送った2冊の詩集も全て後の遺稿集通りではないと考えている。この2冊の詩集の中の作品について、大正15年2月14日のみすゞ宛ての手紙で、正祐は短評を加えていた。しかし、評された作品は後に全集として出版された遺稿集の中の一部である。

第1遺稿集『美しい町』に収録された作品は172編で、そのうち掲載誌が判明した作品と掲載誌は判明しないが、みすゞ自身が遺稿集手帳の作品タイトルのうえに を付けて、注で「印は活字になりしもの」とした作品は全部で48編である。掲載号は、大正12年9月号から、昭和4年5月号までである。そのうち、大正12年の作品は7編、大正13年のは29編、大正15年のは1編、昭和に入ってからのは5編である。その他の6編は掲載誌が判明しなかったものである。『生涯』

¹ 『生涯』（JULA 出版局、1993）27頁

² 『生涯』 243頁

は、第1遺稿集に収録された作品は大正12年から13年までのものとする。確かに、掲載された作品から見れば、大正12年と13年のものが多いが、昭和に入ってからのものである。そして、「夕顔」(全Ⅰ 34頁)という作品は昭和4年5月号の『愛誦』に掲載されて、みすゞが投稿した最後の作品である。また、その作品の中に満ちている悲しい雰囲気は、デビューしたばかりのみすゞの気持ちと相応しくないと思う。「夕顔」の最後の一連に、「さびしくなつた夕顔は／だんだん下を／むきました」と歌っている。このイメージは、不幸な結婚生活の中に沈んでいたみすゞのイメージと合っていると思う。そして、「夕顔」については、正祐の評がない。つまり、みすゞが結婚する前に、正祐に送った詩集『美しい町』の中に、「夕顔」は収録されなかったかもしれない。「夕顔」は昭和に入ってからのものである。みすゞが自殺する前に清書した時、第1遺稿集の中に収録されたと思う。

第2遺稿集『空の母さま』に収録された作品は178編で、掲載誌が判明した作品と掲載誌は判明しなかったが、があるから、掲載されたことがわかる作品は全部で36編である。掲載号は大正14年1月号から、昭和10年8月号までである。そのうち、大正14年の作品は10編、大正15年の5編、昭和2年の10編、昭和3年の5編、昭和4年の2編と昭和10年の1編がある。その他の3編は掲載誌が不明である。昭和10年の1編は、みすゞの死後、西條八十によって掲載されたものである。『生涯』では、第2遺稿集に収録された作品は大正13年から14年までのものであると述べられている。しかし、掲載された作品から見れば、大正13年の作品は一つもない、その上、昭和に入ってからのものである。

第3遺稿集『さみしい王女』に収録された作品は162編である。掲載されたのは僅か10編である。そのうち、大正15年1編、昭和2年1編、昭和3年2編、昭和4年5編、昭和10年1編である。昭和10年の1編はみすゞの死後、八十によって掲載されたものである。『生涯』では、第3遺稿集に収録された作品は大正15年から昭和3年頃までのものとある。しかし、掲載された作品から見ると、大正15年の作品は僅か1編であるが、昭和4年のものは5編もある。

また、遺稿集の中の作品順は雑誌に掲載された順の通りではなく、大正期と昭和期のものが混じっている。例えば、第1遺稿集に収録され、大正12年9月号の『童話』に掲載された作品「お魚」のすぐ後ろに収録された「雲」は、昭和2年4月号の『愛誦』に掲載された作品である。その「雲」のすぐ後ろに収録されたのはまた大正12年9月号の『婦人倶楽部』に掲載された作品「芝居小屋」である。そして、同じ年の作品でも、掲載された月の前後順で収録されたのではない。例えば、第1遺稿集に収録された大正13年2月号の『婦人之友』に掲載された「麦藁編む子の唄」の後ろに収録された「砂の王国」は、大正13年1月号の『童話』に掲載された作品である。

それだけではなく、みすゞの作品は遺稿集の別のところに収録されたが、時間的に見れば連続的なもの、あるいは同じモチーフを持つものもある。例えば、第1遺稿集に収録され、タイトルが同じ「楽隊」である2編の作品がある。1編は全集の12頁にあり、他の1編は全集の91頁にある。内容から見れば同じモチーフであるが、二つの作品の間に、59編の作品を挟んでいる。

また例えば、「小さな朝顔」(全Ⅱ 35頁)と「空いろの花」(全Ⅱ 245頁)は、同じ第2遺稿集に収録されたが、二つの作品の間に、133編の作品を挟んでいる。しかし、二つの作品のモチーフは同じであり、作品を作った時期が同じであると言ってもよいと思う。その他、いくつかの例

もある。

以上の分析から見ると、遺稿集の中の作品順は必ずしも作品の完成順ではなく、雑誌に掲載された順でもないのである。

なぜ矢崎氏はみすゞの創作が昭和3年までで終わったと考えたのか。『生涯』に、みすゞの投稿仲間である島田忠夫氏の昭和12年2月号の『蠟人形』に掲載されたみすゞについての思い出『薄幸の童謡詩人 金子みすゞ氏の作品』の引用がある³。

……その夫は放蕩無頼の人であるとも報じて来た。詩作を全く厳禁され、一切の文通を止められて了つてゐた。……

矢崎氏はこの島田忠夫氏の思い出の文章を証拠として、みすゞが昭和3年頃、詩作を夫に厳禁され止めたと推測したのであろう。しかし、島田忠夫氏の思い出はいくつかの誤りがある。例えば、島田忠夫氏は文章の中で次のように書いていた。

……私の記憶に誤りがなければ、金子氏は固疾の耳を患んでいる人であった筈である。勤務する書籍店主の親戚にあたる青年に嫁し、……⁴

みすゞは「固疾の耳」を患んでいないし、夫も「勤務する書籍店主の親戚にあたる青年」ではない。島田忠夫氏の思い出の中には、このような誤った記憶があるから、彼の文章をそのまま事実とすることはできないと思う。そして、もし「一切の文通を止められて了つてゐた」なら、なぜ島田忠夫氏とみすゞの間に文通できたのか。また、詩を書くことは厳禁されても、書きたいなら、密かに書くこともできるであろう。もし厳禁されたから、詩作を止めたのなら、清書もできなかったのではないだろうか。

第3遺稿集『さみしい王女』の手帳原本の「時のお爺さん」という作品の頁に、「注、 印、 なほしてみてよくなれば、入れる。×印、 けづつてしまふもの」というみすゞの注がある。これ以後の作品のタイトルの上に、「 印」と「×」印のあるものがある。その「入れる」と「けづつてしまふ」ものは、西條八十に送るつもりの手帳を清書した時に選択や、推敲された作品のことである。そして、八十に見せたくない作品は、みすゞ自身が八十に送るつもりの手帳から削除したのである。だから、正祐に送った手帳と八十に送った手帳の中の作品数は違ふと推測できる。正祐に送った手帳の中の作品は後に全集として出版された512編である。八十に送った手帳はその後紛失したようで、明確な作品数はわからない。四百数十編と推測されているが、正祐に送った手帳の作品数よりもっと多いという可能性もあると思う。なぜなら、八十に送った手帳の中にあり、正祐に送った手帳の中にない作品がある。例えば「先生」⁵という作品は、八十が昭和10年の『少女倶楽部』の中の「私の好きな詩から」の欄に掲載されたが、この作品は正祐に送っ

³ 『生涯』 297頁

⁴ 西口 徹 『総特集金子みすゞ没後70年』（河出書房新社、2000）149頁

⁵ 佐藤光一 『日本の少年詩・少女詩Ⅱ 少女詩編』（大空社、1994）358頁

た手帳の中にはないのである。

そのほか、遺稿集の512編の中に収録されていない作品は3編も発見された。それは大正12年9月号の『婦人画報』に掲載された「おとむらい」、大正13年4月号の『婦人之友』に掲載された「パチンコと雀」と大正13年7月号の『婦人世界』に掲載された「浮き雲」である。そして、遺稿集の手帳の中にタイトルだけ残して、該当する作品がないものもある。それは全部八十に送った手帳の中にあるのかもしれない。

正祐に送った手帳は博文館のポケットダイアリーの紙質見本を使って作ったものである。手帳の中のみすゞの字はきれいであるが、時々消したところや、書き直したところもある。みすゞの自選詩集『琅玕集』は、3冊の遺稿集と同じ博文館のポケットダイアリーの紙質見本を使って作ったものである。本来は左開きの手帳であるが、みすゞは手帳の上下を逆さにして、右開きで使った。そして、表紙の上部に、山と木と岩が描いてあり、きれいな楕円に切った布を貼っていて、丁寧に飾っている。女性詩人の繊細さを感じさせられる。その『琅玕集』に比べて、3冊の遺稿集の手帳はそれほど完璧とは言えないのである。みすゞの性格から考えると、このような飾りがなく、正祐に送った3冊の遺稿集は人に送るために用意した定稿ではない。つまり、これは八十に贈るつもりで詩集を清書するための準備であると思う。

以上の分析からの結論は、正祐に送った遺稿集は未定稿で、八十に送った遺稿集は完成品であると思う。そして、第1遺稿集と第2遺稿集は、みすゞが結婚する前に正祐に送った2冊の詩集をもととして、作品を多く追加してできたものであると思う。

2. 遺稿集の巻名について

作家にとって、自分の作品に命名することは、親が子供に名前を付けると同じ、特別な意味があり、愛を含んでいるに違いない。みすゞの三冊の遺稿集の巻名もきっと彼女が何か強く意識して命名したのである。その巻名は、彼女にとって重要な意味がある。

(1) 『美しい町』

もし自由自在に自分の望む夢を見ることが出来るという能力が人間に与えられていたならば、……私はどんな風に来るかわからない。そうしてどんな風にでもできる！⁶

これは佐藤春夫の小説『美しき町』の中の登場人物の一人である若い絵描きの言葉である。彼の金持ちの友達は全部の財産を投じて、一つの美しい町を建てようと、彼に町のデザインをたのんだ。彼はその依頼を受け、嬉しくて先に引用した言葉を述べた。

みすゞの第1遺稿集『美しい町』の中に、巻名と同じ作品「美しい町」がある。

⁶ 佐藤春夫 『美しき町・西班牙犬の家他六篇』（岩波書店、1992） 34頁

うつく まち
美しい町

おも だ
ふと思ひ出す、あの町の / かわ
川のはとりの、あか や ね
赤い屋根、

さうして、おも おほかは みづ うへ しろ ほ
青い大川の / 水の上には、白い帆が / しづかに、しづかに動いてた。

さうして、か し くさ うへ わか あ か き を ぢ
川岸の草の上 / 若い、絵描きの小父さんが / ぼんやり、みづ
水をみつめてた。

さうして、わたし なに
私は何してた。

おも だ か ご ほん さし へ
思ひ出せぬとおもつたら / それは、たれかに借りてゐた / 御本の挿絵でありました。

(全 I 69頁)

この作品「美しい町」の中には、「若い絵描きの小父さん」の登場もあるから、思わず、佐藤春夫の小説『美しき町』を想起した。どんなことに対しても「不思議でたまらない」みすゞには、お話作りの材料がとても多い。彼女の目に映ったものは全て彼女の思う通りに組み合わせて、そして、詩の世界の中で、「自分のお国のお山や川を」「思ふ通りに変へてゆきます」。(「砂の王国」全 I 57頁)まさに『美しき町』の中の若い絵描きが言った通り、「どんな風にでも出来る」のである。

みすゞはお話作りが非常に好きで、いつも時間があつたら、一人いる時に、頭の中で何かお話を考える。それは、作品「学校へゆくみち」(全 II 124頁)を読めばわかる。そして、みすゞは思考が機敏で、即興でお話を作れ、とても上手であった。『生涯』の中の彼女の同級生の証言から、それがわかる⁷。

佐藤春夫の『美しき町』は大正8年の8、9、12月号の『改造』に連載された小説であるから、みすゞはたぶん読んだと思う。登場人物である若い絵描きだけではなく、詩の中に描いた町の景色も『美しき町』の中に描いた理想中の町のイメージと似ている。『美しき町』の中の町作り計画の提案者は何年間も「美しい町」のことを考えて、そして、3年間町作り計画のデザインを行っていた。また、彼はその「美しい町」に住む人に対しての希望も提示している。「互いに自分たちで折り合って夫婦になった人々、そうして彼らは相方とも最初の結婚をつづけていて子供のあつた人たちでありたい」とか、「彼自身の最も好きな職業を自分の職業として折んだ人。そして、その故にその職業に最も熟達してそれで身を立てている人」等である。総じて、この町に住む人はみんな幸せな人である。

みすゞも自分の思う通りその幸せいっぱいな町を作りたいのであろう。なぜなら、彼女が20歳後に移り住んだ大都市下関は、彼女から見れば、幸せではない町であったからだ。

⁷ 『生涯』107頁 松浦乃枝回想 108頁 井上チエ回想

しあはせ

桃いろお衣^べのしあはせが／ひとりしくしく泣いてゐた。

夜更けて雨戸をたたいても／誰も知らない、さびしさに、
のぞけば、暗い灯^ひのかげに／やつれた母さん、病気の子。

かなしく次のかどに立ち／またそのさきの戸をたたき、
町中まはつてみたけれど／誰もいれてはくれないと、

月の夜ふけの裏町で／ひとりしくしく泣いてゐた。

(全Ⅰ 215頁)

「町中まはつてみたけれど」、どの家でも、「しあはせ」を「いれてはくれない」。だから、みすゞは詩の世界の中に、自分の思う通りの町を作りたかったのではないだろうか。

みすゞにとって、最も好きな職業は詩人であろう。詩を作って投稿し、掲載されて、西條八十をはじめ、投稿仲間や読者に認められることは、彼女にとって、自己の存在意義を明らかにすることであろう。詩人であるみすゞは「手品師」(全Ⅰ 212頁)で、「魔法の杖」(全Ⅰ 74頁)も使える。雲にも、雨にも変身できる。お話の国の王女にもなれるし、春のお使いにもなれる。

『美しき町』の中の町作り計画の提案者は、若い絵描きに、ゲーテの『ファウスト』第二部の次の一節を朗読して聞かせている。

わたしですか。わたしは物を散ずる力だ、詩だ。

自分の一番大事な占有物を蒔き散らして、そして自分の器をなす詩人だ。

わたしも無限の富を有している。

自分の値踏みをして、ブルース様に負けぬつもりだ。

富の神の饗応や舞踏を飾って賑やかにして。

神の持っておられぬ物をわたしは蒔き散らします。⁸

みすゞもそのようである。彼女は自分の無限の詩才という「無限の富」を蒔き散らした。そして、詩「夢売り」(全Ⅱ 116頁)の中のやさしい夢売りのように、「夢の買へない／うら町の／さびしい子等の／ところへも／だまつて夢を／おいてゆく」。「神の持っておられぬ物を」「しあわせ」をみすゞは蒔き散らしたのである。

小説『美しき町』の中の町作り計画は結局、空想のままに終わったが、みすゞは自分の町作り計画を成功させたいであろう。こうして、若い投稿詩人たちの「憧れの星」であるみすゞは、自

⁸ 『美しき町・西班牙犬の家他六篇』 27頁

分の大きな町作りの夢を実現するの第1歩である第1詩集、自分の思う通りに作った詩の王国の名前を『美しい町』と命名したのではないだろうか。

(2) 『空のかあさま』

みすゞの第2遺稿集の巻名は『空のかあさま』である。この巻の中の最初の章名も同じ「空のかあさま」である。しかし、全集の中には、同じタイトルの作品がない。そのような作品は元々なかったのか、紛失したのか、みすゞ自身が削除したのか、ほかのタイトルに変わったのか、といろいろな推測が可能だ。一つの試論として、私の考えを示してみたい。結論から言えば、『空のかあさま』に該当する作品はないが、「空のかあさま」はある作品のモチーフであると思う。その作品とは、第2遺稿集の「空のかあさま」の章に収録されている「去年のけふ 大震災記念日に」である。

きよねん いま わたし つみ き
去年のけふは今ごろは / 私は積木をしました。
つみ き しる くづ
積木の城はがらと / 見るまに崩れて散りました。

きよねん ゆふがた しば ふ を
去年のけふの、夕方は / 芝生のうへに居りました。
くろ くわ じくも かあ めめ
黒い火事雲こはいけど / 母さんお腫がありました。

きよねん く うち や
去年のけふが暮れてから / せんのお家は焼けました。
ひ とど やうふく つみ き しる や
あの日届いた洋服も / 積木の城も焼けました。

きよねん よる ふ ひ いろうつ くも ま
去年のけふの夜更けて / 火の色映る雲の間に
しろう つき み かあ だ く
しろい月かげ見たときも / 母さん抱いてて呉れました。

べべ うち た
お衣もみんなあたらしい / お家もとうに建つたけど、
ひ かあ こし
あの日の母さんかへらない。 / 今年さはびしくなりました。

(全Ⅱ 26頁)

この詩は時間の順で歌われている。最終連からは、母がもういないというイメージを強く感じる。亡くなった母は天国へ行ったから、母は空にいるであろう。

「去年のけふ 大震災記念日に」の中の「大震災」は、大正12年9月1日の関東大震災のことである。その震災は、マグニチュード7.9で、大被害を引き起こした。死者9万9千人、行方不明4万3千人、負傷者10万人をこえという⁹。その震災で、母親がなくなった子供は数えきれないほど多い。作品「去年のけふ 大震災記念日に」は震災の翌々年の大正14年に掲載されたが、おそらくそれは時節に合わせて投稿した作品であろう。母をかけがえのない存在であると

⁹ 『国史大辞典』3巻(吉川弘文館、1983)「関東大震災」に拠る

思っているみすゞにとって、この詩は、震災で母親がなくなった子供たちにかわって歌った母への挽歌のように思われる。これが第2遺稿集の巻名が『空のかあさま』と命名された理由の一つであると思う。

さらに考察を進めてみたい。みすゞの詩の中で、月を描いているものが多い。彼女にとって、そのさみしい時、いつもそばにいて、見守ってくれる月は、母の代わりであると思う。

お使ひ

お月さま / 私は使ひにまゐります。
よその嬢^{ぢやう}ちゃんのいいおべべ / しつかり胸に抱きしめて。

お月さま / あなたも行つてくださるの、
私の駆けてゆくところへ。

お月さま / いたづらつ子に逢はなけりや / いつも私はうれしいの。
おかあさんのおしごとを / よそへ届けにゆくことは。

それに、それに / お月さま / 私はほんとにうれしいの。
あなたがまあるくなるころに / 私も春着ができるから。

(全Ⅱ 24頁)

母の仕事を手伝うために、夜でもお使いをしなければならない女の子にとって、誰もいない夜の町はどれほど怖くて、心細いであろう。しかし、「お月さま」が一緒にいて、空から見守ってくれるから、いろいろ嬉しいことを考えて、お月さまに語りかけ、心強くなったのである。その時のお月さまは母の代わりではないだろうか。

そして、みすゞの描く月は、よい母のイメージを感じる。詩「月のひかり 二」(全Ⅱ 146頁)の中に、月のひかりは「暗いさみしい裏町」の「まづしいみなし児が」、「ちつとも痛くないやうに」、「その眼のなかへもはいります」。そして、「子供はやがてねむつても / 月のひかりは夜明けまで / しづかにそこに佇つてます」。月はどんな子供も見捨てることはなく、いつもやさしいひかりを投げかけ見守っている。これはみすゞにとって、愛に満ちた理想の母のイメージであろう。だから、彼女は月を母の代わりに考えたと思う。そして、月は空にいるから、「空のかあさま」なのではないだろうか。

以上述べた二つの理由から、第2遺稿集の巻名とその最初の章名は『空のかあさま』と名付けたのではないかと私は考えている。

(3) 『さみしい王女』

第3遺稿集の巻名は『さみしい王女』である。この巻に「さみしい王女」という作品も収録さ

れている。

つよい王子にすぐわれて / 城へかへつた、おひめさま
城はむかしの城だけど / 薔薇もかはらず咲くけれど、

なぜかさみしいおひめさま / けふもお空を眺めてた。

(魔法つかひはこはいけど / あのはてしないあを空を、
白くかがやく翅のべて / はるかに遠く旅してた、
小鳥のころがなつかしい。)

街の上には花が飛び / 城に宴はまだつづく。
それもさみしいおひめさま / ひとり日暮の花園で、
真紅な薔薇は見も向かず / お空ばかりを眺めてた。

(全Ⅲ 45頁)

そして、この巻の最後に、みすゞの「巻末手記」がある。

くわんまつしゆ き
巻 末手記

できました / できました、
かはいいい詩集ができました。

我とわが身に訓ふれど / 心をどらず / さみしさよ。

夏暮れ / 秋もはや更けぬ、
針もつひまのわが手わざ / ただにむなしき心地する。

誰に見せうぞ / 我さへも、心足らず / さみしさよ。

(ああ、つひに / 登り得ずして帰り来し、
山のすがたは / 雲に消ゆ。)

とにかくに / むなしきわざと知りながら、
秋の灯の更くるまを / ただひたむきに / 書いて来し。

あす
明日よりは / 何を書かうぞ / さみしさよ。

(全Ⅲ 280頁)

「巻末手記」の中で、みすゞは繰り返し「さみしさ」を歌っていることから見れば、その「さみしい王女」はみすゞ自身のことではないだろうか。

「さみしい王女」の題材はドイツ童話である『白鳥の湖』から取ったのかもしれない。鳥になった姫、王子、魔法使い等は童話から取り出され、みすゞによって再構成され、自分の当時の状況を再現したのではないだろうか。昭和4年の大津高女の同窓会誌『ミサヲ』の12号『卒業生通信・第八回』に、みすゞは「……あの頃日輪の高さにまで翔った空想も今は翼を失ひました。……¹⁰」という文章が収録されている。

「つよい王子にすくわれて」というのは、結婚して、母のそばから離れて、自立したということであろう。「空」は昔の空想の世界で、「城」は、今の現実世界である。つまり、「翼を失ひました」みすゞは空想の世界から現実の世界に落ちた。「城はむかしの城だけど」というのは、まわりの現実社会はそのままかわらず時間が流れている。「薔薇もかはらず咲くけれど」、「薔薇」は詩作のことの隠喩ではないだろうか。つまり、詩は時々書いたが、空想の翼を失ったみすゞは、もう創作の情熱がなくなりつつあったのであろう。第3遺稿集に収録された作品はほとんど投稿しなかったことから見れば、それがわかる。そして、最終連の「お空ばかりを眺めてた」とは、「日輪の高さにまで翔った空想」の翼を失った後、「あの頃」が恋しくてたまらないのではないだろうか。

「さみしい王女」の他、彼女の当時の状況を隠喩する詩はいくつもある。例えば「啞蟬」という詩がある。

(前略)

おふし
啞の蟬は歌を書く / だまつて葉つばに歌を書く、
誰も見ぬとき歌を書く / 誰もうたはぬ歌を書く。

(秋が来たなら地に落ちて / 朽ちる葉つばと知らぬやら。)

(全Ⅲ 26頁)

みすゞは詩を書いても、投稿しなかったから、「誰もうたはぬ歌を書く」というのである。この啞蟬は彼女自身の隠喩だと思う。

みすゞは昔話のその後のことに関心を持っていた。その後の話を書くことが好きであった。第1遺稿集の中に収録された5編の「おはなしのうた」を読めばわかる。彼女から見れば、昔話の終わりは実は終わりではない。人生と同じ、今の終わりは後のことの始めである。結婚することは、他人から見れば、自立し、一人前の大人になったことであり、めでたいことであろう。童話『白鳥の湖』も、王女は王子と結婚して、幸せな生活を始めたというハッピーエンドである。し

¹⁰ 『生涯』 299頁

かし、それから、話はどうなったか、王女は本当に幸せになったか、王子は一度小鳥になって空に翔ったことがある王女の考え方がわかるかどうか、誰も関心を向けない。少なくとも、結婚したみすゞは幸せではない、「さみしい王女」になった。

「さみしい王女」は、当時のみすゞ自身の状況と気持ちを述べると同時に、終わりは他の始めであるという隠喩の意味もあるであろう。

また、「きりぎりすの山登り」という詩がある。

きりぎつちよん、山のぼり／朝からとうから、山のぼり。

ヤ、ピントコ、ドッコイ、ピントコ、ナ。

山は朝日だ、野は朝露だ／とても跳ねるぞ、^は元気だぞ。

ヤ、ピントコ、ドッコイ、ピントコ、ナ。

あの山、てつぺん、秋の空／つめたく触るぞ、この^さ髭に。

ヤ、ピントコ、ドッコイ、ピントコ、ナ。

一跳ね、跳ねれば、昨夜見た／お星の^{ゆふべ}ところへも、行かれるぞ。

ヤ、ピントコ、ドッコイ、ピントコ、ナ。

お日さま、遠いぞ、さアむいぞ。／あの山、あの山、まだとほい。

ヤ、ピントコ、ドッコイ、ピントコ、ナ。

見たよなこの花、^{しら き きやう}白桔梗／昨夜のお宿だ、おうや、おや。

ヤ、ドッコイ、つかれた、つかれた、ナ。

山は月夜だ、野は夜露／露でも^{ゆふべ}のんで、寝ようかな。

アアア、アアア、あくびだ、ねむたい、ナ。

(全Ⅲ 278頁)

きりぎりすは元気いっぱい、希望いっぱい山に登るつもりである。山を越えたら、幸せな終わりがあるかもしれないと期待している。このきりぎりすのみすゞ自身の隠喩で、みすゞも幸せを求めている。しかし、どんなに努力しても、現実の中で、終わりが無い、これが終わったら、他が始まる。輪のようにずっと続いている。幸せな終わりは「まだとほい」から、「巻末手記」の中に書いたように、「登り得ずして帰り来し／山のすがたは／雲に消ゆ」きりぎりす みすゞは、幸せを求めることをあきらめたのであろう。

「夏暮れ／秋もはや更けぬ」、「誰もうたはぬ歌を書く」^や啞蟬 みすゞの死期も迫っている。「秋が来たなら地に落ちて／朽ちる葉つばと知らぬやら」、「誰に見せうぞ／我さへも、心足らず／

さみしさよ。」「明日よりは／何を書かうぞ／さみしさよ。』これは昭和4年の秋、病気がだんだん重くなったみすゞのさみしい心の声である。

『さみしい王女』は、みすゞの詩人としての終わり、「平凡」になった自らである。だから、第3遺稿集の巻名は『さみしい王女』と命名したのであろう。そして、みすゞは自分の死期を予感していたのである。

おわりに

みすゞの詩は、日記のようなものと矢崎氏は著書でふれている。みすゞの弟正祐も「みすゞの作品は、みすゞの私生活からきているものがずいぶんあるんです」と言った¹¹。だから、遺稿集の成立と命名についての考察は、みすゞの詩を理解する上で、重要であると思う。本稿で取り上げた意見は私の私見である。みすゞの作品をめぐっては、いまだ不明な部分が多い。今後もさらに考察を深めていきたいと思う。多くの皆様のご批評とご指導をお願いしたいと思う。

参考文献

矢崎節夫	『新装版 金子みすゞ全集』	JULA 出版局	1984
矢崎節夫	『童謡詩人金子みすゞの生涯』	JULA 出版局	1993
佐藤光一	『日本の少年詩・少女詩Ⅱ 少女詩編』	大空社	1994
佐藤春夫	『美しき町・西班牙犬の家 他六篇』	岩波書店	1992
西口 徹	『総特集金子みすゞ没後70年』	河出書房新社	2000

付記：みすゞの作品の引用は『新装版金子みすゞ全集』（JULA 出版局 1984）により、漢字は通用の字体に改めた。引用するみすゞの作品は、全集巻号と頁数を併記しておく。（全Ⅰ）は、金子みすゞ全集第一巻『美しい町』、（全Ⅱ）は、第二巻『空のかあさま』、（全Ⅲ）は、第三巻『さみしい王女』の略である。本稿の執筆の際して、ご教示をいただいた佐久間正教授にお礼申しあげる。

¹¹ 『生涯』 18頁